

○流路・井堰の調査

調査区の南側からは、弥生時代中期以降に開削された溝や流路が見つかりました。集落の南側を新たに水田域として開発するため、大規模な土木工事が行われたようです。流路には、井堰や溜池状の施設が設けられ、中期以降の居住域の拡大とよく対応しています。



弥生時代中期の溝（2区 東から）



井堰 1（8区 東から）※



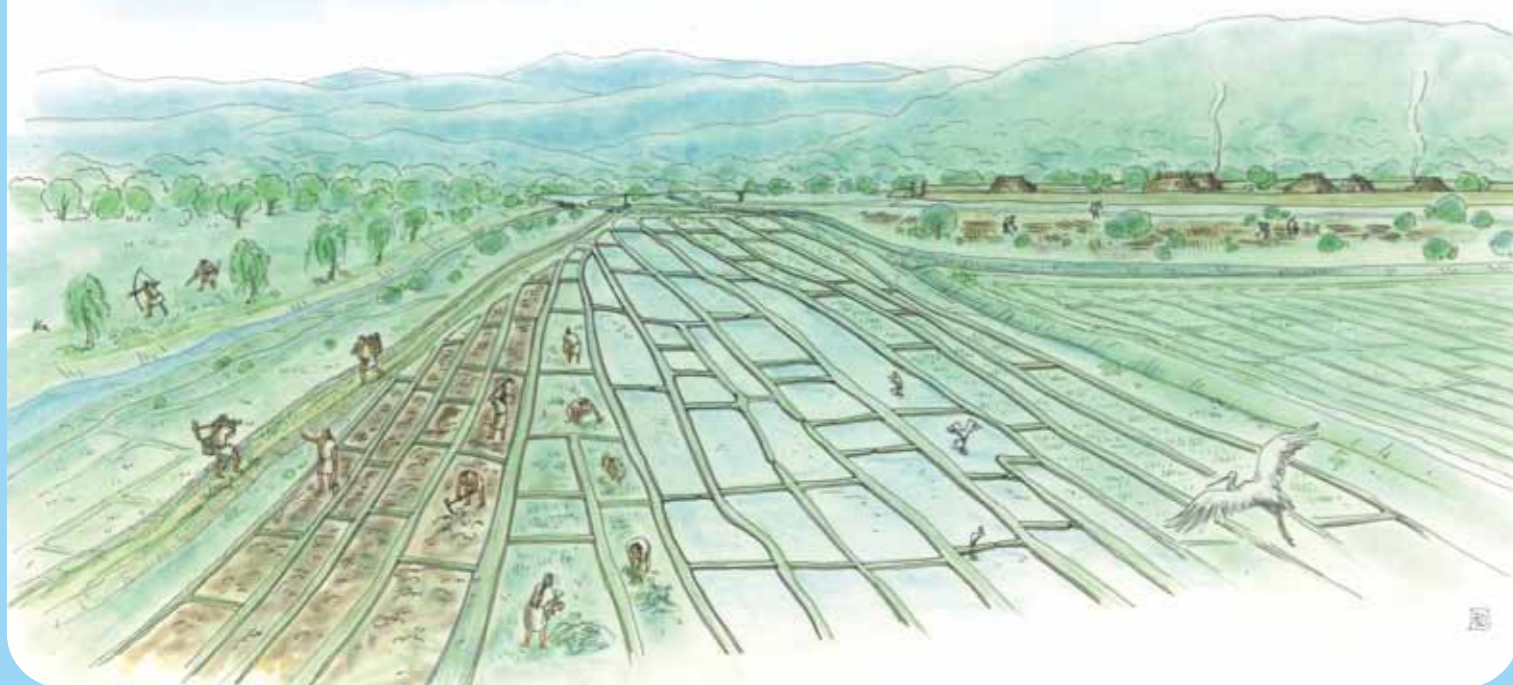
弥生時代中期の流路など（6区・8区 西から）※



井堰 2（6区 北東から）※  
杭を打ち込み、横木を渡して、つくられています。  
弥生時代中期末から後期初頭の堰です。

※調査は終了しています。

今回の調査は、安満遺跡が弥生文化の原風景を秘めた稀有な遺跡であることを明らかにしました。高槻市では、前期の水田や墓域を現地に保存するとともに、調査成果を今後の整備に活かしていきます。



弥生時代前期の水田と環濠集落 推定復元図（早川和子画）

# あ ま 安 満 遺 跡

—いまよみがえる 弥生文化の原風景—



安満遺跡は、大阪平野の北東部、淀川右岸の三島地域にあって、松尾川が形成した扇状地に立地する弥生時代の集落遺跡です。昭和 3 年、京都帝国大学農学部摂津農場の開設時に発見され、その時の調査で出土した土器の検討から、北部九州に成立した弥生文化が時をおかずに畿内へ流入したとの指摘がはじめてなされた学史上著名な遺跡です。

これまでの調査で、弥生時代約 700 年間を通じて存続した三島地域の拠点的な集落で、近畿地方の弥生社会と弥生人の多様な生活ぶりを示す重要な遺跡であることが明らかになっています。遺跡の広がり東西約 1.5 km、南北約 0.5 km。環濠を伴う居住域、用水路をそなえた水田などの生産域、方形周溝墓を中心とする墓域という、集落の三要素が確認されています。しかも、それらの移り変わりが追える点がきわめて貴重です。

高槻市では、安満遺跡公園内の雨水貯留施設の建設に伴い、平成 26 年 9 月から発掘調査を行っています。今回の調査区では、弥生時代前期の水田と、弥生時代前期から後期の墓域、中期以降の灌漑施設、古代・中世の水田などを検出しました。



調査地の位置

○弥生時代前期から後期の墓域の調査

前期末の洪水により、水田域には砂礫が厚く堆積し、地形が変わってしまいました。水田に代わって、弥生人はここに墓地をつくりました。方形周溝墓（12基）、木棺墓（2基）、土器棺墓（2基）などが見つかっています。



弥生時代の方形周溝墓群（西から）



墓に供えられた土器  
方形周溝墓3の周溝から出土。  
弥生時代中期初頭の土器です。



前期末の55土器棺（3区 南から）



中期後半の69土器棺（2区 南から）

大型の壺を逆さにして棺に利用しています。内部には石斧が副葬されていました。



中期の方形周溝墓（3区 南から）

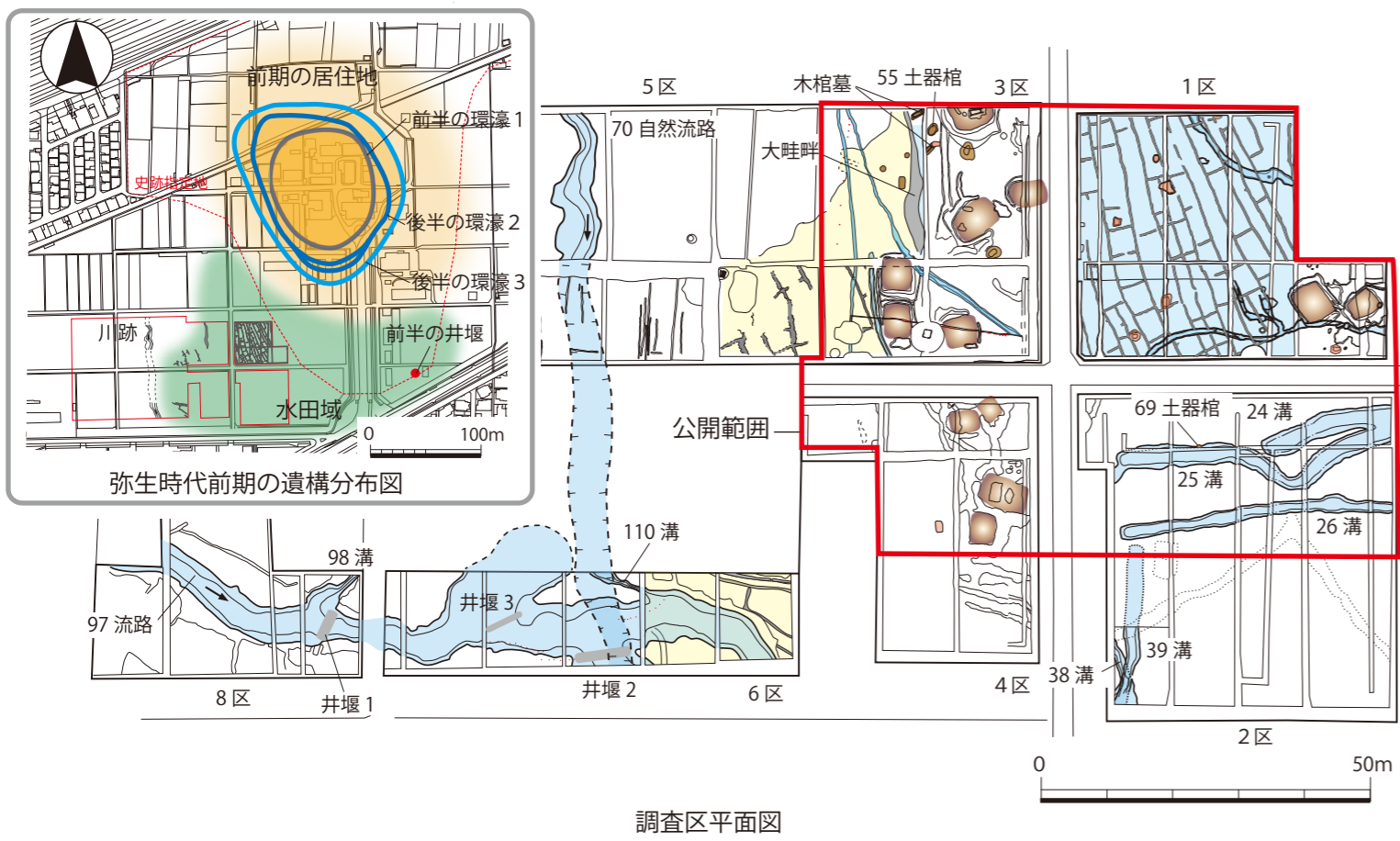


後期の方形周溝墓（1区 西から）



組合せ式の木棺。  
側板、小口板の痕跡が確認できます。

木棺墓（3区 東から）



調査区平面図

○弥生時代前期の水田の調査



弥生時代前期の水田（1区 南から）

南東に緩やかに傾斜する地形に沿って、約3m間隔で南北方向の畦畔を設け、東西の畦畔で短冊形に区切っています。この水田は、前期末に発生した洪水が運んだ砂礫に覆われたため、放棄されました。砂礫を踏み込んだ足あとがいくつも見つかっています。洪水で水没した田んぼの様子を見に来たのでしょうか。

1区から前期（約2,500年前）の小区画水田が良好な状態で見つかりました。幅20～30cm、高さ5cmの畦畔（あぜ）で区切られ、水田一枚は、10～65㎡、57枚を確認しています。高い田から低い田へ、畦畔を越流させて給水したようです。1区の水田域は3区の大畦畔まで連続していて、その西側は別の水田区域とみられます。この結果、前期の水田域の広がりには9,000㎡（東西90m、南北100m）以上と推定されます。



弥生人の足あと